

異国遍歴小説における異国

— 「女護が島」表象を中心に—

金学淳*

(e-mail: harksoon@hotmail.com)

目次

- 第一節 はじめに
 - 第二節 幻想の異国とその馴致
 - 第三節 平賀源内『風流志道軒伝』の「女護が嶋」
 - 第四節 遊谷子『異国奇談和莊兵衛』の「女護が嶋」
 - 第五節 曲亭馬琴の女人国（女護の島）
 - 第六節 おわりに
-

第一節 はじめに

江戸時代の後期に入ると、日本の近海に異国船が出現し、異国から開港や貿易を要求されるようになった。江戸時代において、日本が経験したことのない異国との頻繁な接触は、鎖国政策を支配原理としていた幕府に脅威をもたらし始め、幕府は異国という文化的・政治的に相違する世界が実在することを改めて認識し、その対処を考えるようになった。

その一方で、江戸時代の人々は、鎖国政策で渡航が厳しく制限されており、異国についての情報や知識を得ることは、容易ではなかった。彼らが異国を知ることができるのは、当時中国から伝来した、あるいは中国を経由して西洋からもたらされた、一部の百科事典・類書や地理書などによるしかなかった。そこから得た異国像は、中国、朝鮮、琉球などの、日本周辺の実在する国々と、イギリス、ロシア、イタリアなどの、実在はするが現実

* 韓国交通大学校 講師、日本文化・異国表象

味の薄い異国と、穿胸、長脚、長臂などの現実では存在しない想像の国々とが混在したものであった。

このような時代に、江戸時代の人々の人気を得たのが、異国巡りを主な主題とした異国遍歴小説であった。これらの作品においては、現実に存在する異国と想像上の異国とが混ざり合っており、主人公は奇妙奇怪な怪物たちが存在し、不可思議な風俗をもつ異国を巡りながら、冒険をするのである。江戸時代の人々は、その小説を通して異国の情報を獲得し、また異国への好奇心を満たしたのである。このような異国巡りの物語を成立させる条件となっていたのが、鎖国体制にも関わらず、中国から（あるいは中国を経由して、中華秩序に属さない国々から）、様々なルートを通して近世日本に到来していた異国情報である。曲亭馬琴はマテオ・リッチの『坤輿万国全図』（1602）や、ジュリオ・アレーニの『職方外紀』（1623）に基づいた地理書類などによって、例えば南アメリカ大陸のアマゾン川流域やタタール地方などの、中華文明から遥かに遠い地域についての情報を獲得していた。さらに、そこで得られた異国に関する情報は、ヨーロッパに植民地化される両インド（アジアのインド亜大陸と、西インド諸島）や南アメリカなどの現実の土地に関するものもあれば、「女人国」などの架空の土地に関するものもあった。

重要なことは、こうした状況の中で書かれた馬琴作品や、それに類似する遍歴小説における世界の表象の方法は、異国、特に幻想的な異国像を抑制しようとするものであった。本論では、馬琴の遍歴小説である『風見草婦女節用』（1799）、『庭莊子珍物茶話』（1797）、『椿説弓張月』（1807～1811）、それらに先行する類似した異国遍歴小説（平賀源内『風流志道軒伝』〔1763〕と遊谷子『異国奇談和莊兵衛』〔1774〕）を取り上げ、特に女だけが住む島「女護が島」の伝説にかかわる表象の特徴を分析する。

まず、江戸時代の遍歴小説における現実と幻想の異国に関する主要な原典の一つである『和漢三才図会』（1712）について述べつつ、遍歴小説においてはその異国の幻想性が教訓や相対化によって抑制される傾向があったことを確認する。そして馬琴作品を含む遍歴小説における「女護が島」表象について分析し、幻想の異国がその異国性を剥奪されてゆく様を確認する。なお、江戸時代の遍歴小説についての研究は、野田寿雄、板坂則子、小谷信行、川村湊、佐藤至子、風間誠史、播本眞一など数多いが、本論ではこうした先行研究に多くを学びつつ、特に「女護が島」表象に焦点を絞って論じることとする。¹⁾

1) 野田寿雄 (1965) 「近世後期の異国遍歴小説」『国語国分研究』第三一号、北海道大学国文学会。板坂則子 (1979) 「戯作のファンタジー」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂。小谷信行 (1996) 「和莊兵衛の系譜」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』鈴鹿工業高等専門学校。川村湊 (2000) 「馬琴の島——馬琴『椿説弓張月』」『日本文学研究論文集二二 馬琴』若草書房。佐藤至子 (2001) 「試練としての異国遍歴」『日本文学』日本文学協会。風間誠史 (2002) 「『和莊兵衛』覚書—世界の外へ」『相模国文』相模女子大学国文研究会。播本眞一 (2005) 「馬琴と異国」『江戸文学』ペリかん社。

第二節 幻想の異国とその馴致

遍歴小説とは、通常の人間の空間的大きさを超えた人間に近似した存在の生きる場、人間の倫理に反すると考えられる行為が許されている場、想像を超えたテクノロジーが支配する場など、現実にはありえない不思議の国を遊歴する主人公の冒険を描いたものである。こうした作品は、世界各地に見いだされる。ヨーロッパでは、この種の遍歴小説としては、ジョナサン・スウィフトの『ガリバー旅行記』（1726）が特に有名である。²⁾日本での、最初の遍歴小説としてあげられるのが、舎楽齋鈍草子『見外白宇瑠璃』（1758）であり、ほぼヨーロッパの遍歴小説と同じ時代に刊行されている。³⁾この作品は主人公が、地下の蟻の国や竜宮などの異界を覗き見するという内容である。その後、遍歴小説として著名な、平賀源内『風流志道軒伝』や遊谷子『異国奇談和莊兵衛』が登場してくる。特に後者の影響は大きく、それを模倣した多くの遍歴小説が書かれるようになった。⁴⁾

本論では詳述しないが、馬琴の『夢想兵衛胡蝶物語』（前編1809、後編1810）も、これらの作品の系譜に連なっていると言えるだろう。さらに、馬琴読本の代表作『椿説弓張月』も、源為朝が大島・鬼が島・女護の島・琉球などの島をめぐる異国遍歴小説となっている（ただし、異界表象も混在している）。

本論において重要な視点は、これらの遍歴小説には、相矛盾する要素が不安定に併存しているように見えるということである。すなわち、荒唐無稽で見世物的な娯楽的要素と、日本国内の悪徳を戯画化し風刺する、道徳主義的態度である。いわば、幻想の異国が現実に戻されるのではないかということである。本節では、まず遍歴小説の奇想天外な要素の源泉の一つである『和漢三才図会』について触れる。次に、こうした奇想天外さが遍歴小説において現実に戻される傾向について述べることにする。

異国を旅する主人公を描いた遍歴小説が流行する以前、異国情報は中国から伝来した百科事典・類書と地理書に起因するところが多かった。そこに記録された異国には、実在する国々はもちろん、大人国、小人国、不死国などの不可思議な国々が混在し、江戸の外部として理解されたのである。その百科事典中で、江戸時代の人々に大きく影響を与えたのが、日本の類書としてよく知られている『和漢三才図会』（寺島良庵編、1712）である。以下は、以後の遍歴小説にもよく作品の材料として利用されてきた、『和漢三才図会』による異国の特徴を論者がまとめたものである。

2) 小谷信行 (1994) は宇田敏彦「『大人国余聞』—平賀源内と『ガリヴァー旅行記』—」（『江戸文学』第一三号、ベリかん社）に依拠しつつ、平賀源内がスウィフトの『ガリヴァー旅行記』を読み得た可能性があったと指摘している。小谷前掲論文、101頁。

3) 板坂則子 (1979) 「戯作のファンタジー」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、70頁。

4) 野田寿雄、板坂則子、小谷信行、川村湊、佐藤至子、風間誠史、播本眞一論文参照。注1と同じ。

○穿胸（せんきょう、チエンヒヨン）

— 『三才図会』（人物十四卷）によれば、穿胸国は盛海の東にある。人々は胸に竅（あな）があいている。尊者は衣を着けず、胸の竅に竹木を通し、卑者に擡（かつ）がせる、とある。⁵⁾

○長脚（あしなが）長股

— 『三才図会』（人物十四卷）によれば、長脚国は赤水の東にある。その国の人は長臂（ちようひ）国と近い。人々は常に長臂人を背負って海に入り魚を捕る。思うに長臂人の身体は中人のようで臂の長さは二丈。これから類推すれば長脚は三丈ぐらいであろう、とある。⁶⁾

○長臂（ちようひ、チヤンピイ）

— 『三才図会』（人物十四卷）によれば、長臂国は焦僂（しょうぎよう）国の東にある。その国の人は海の東にいる。その人々は手を垂れると地まである。昔ある人が海中で一つの布衣の袖を拾ったが、それは一丈余の長さがあったという、とある。⁷⁾

このような天竺（インド）、中国、日本から形成される三国世界の辺境には、穿胸、長脚、長臂などの異形のものたちが棲息する幻想の異国が存在するという世界観は、『和漢三才図会』や、その主要な典拠である中国明代の『三才図会』（1607）にオリジナルなものではなかった。古くは、中国古代の戦国時代から、秦朝代・漢代にかけて成立した、中国最古の地理書『山海経』に見られたものである。



図一 『和漢三才図会』穿胸【図二】『和漢三才図会』長脚【図三】『和漢三才図会』長臂

5) 寺島良安著、島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注（1986）『和漢三才図会三』平凡社、331頁。

6) 同書、333頁。

7) 同書。

武部健一が、「『山海経』研究の歴史とその現代的意義」⁸⁾で述べているとおり、日本では『山海経』の存在は早くから知られていた。清少納言『枕草子』にも、その二〇段に「手長、足長」への言及があるが、⁹⁾それは『山海経』を元にしたのではないかと推測される。江戸時代の画家・俵屋宗達の『風神雷神図屏風』の雷神の描かれ方にも、『山海経』の影響が認められるとされ、同じく江戸時代の『奇怪鳥獣図鑑』（作者、制作年代不明）には、『山海経』に由来すると考えられる七十六種の中国怪物が描かれている。¹⁰⁾このように、元来は『山海経』に由来する幻想の異国表象は江戸時代の日本にも流入していたのであり、この時期に書かれた遍歴小説もその影響を受けていたと推測してもよいだろう。

ただし、遍歴小説においては、こうした奇想天外な異国表象のみが強調されたわけではなかった。例えば、本論で論じる平賀源内『風流志道軒伝』、遊谷子『異国奇談和莊兵衛』、馬琴の『庭莊子珍物茶話』『風見草婦女節用』などで描かれる穿胸国、女人国などの不可思議な世界を検討してみると、奇想天外な異国での冒険は、日本の現実への「諷諭」¹¹⁾の国と機能する場合が多いことが理解される。これらは「庶民らしい生活感覚から生まれてきた空想と教訓と風刺」を持っており、さらに日本もまた、風変わりな風習を絶対と信じ込んでいる滑稽な国々のひとつにすぎないという、「健康な相対感覚」¹²⁾が働いていることがわかる。例えば、源内の『風流志道軒伝』では、主人公・浅之進が儒教倫理に絶対の価値を置く仙人に説諭されて日本に帰国するように（「是よりはやく国に帰り、道に志（す）と云（ふ）文字を取（つ）て、志道軒と名を改め、浅草の地内において、をどけ咄に人を集め、浮世の穴をいひ尽して、随分人を戒（いましむ）べし」）、¹³⁾どの作品でも、最終的には主人公たちは異国から日本に帰国し、作品は日本の倫理道徳と価値観を最上とする枠組みに回収される。佐藤至子は野田寿雄「近世後期の異国遍歴小説」に言及しつつ、中世には異郷に「ロマンティックな理想像」が投影されているのに対し、近世には異郷が「現実化」される傾向があることを指摘している。野田によれば、異郷は「単なる仮託の世界と化し、そこに現実を投影することによって、現実を滑稽化

8) 武部健一（2007）「『山海経』研究の歴史とその現代的意義」『成城国文学』二三巻。

9) 「荒海（あらうみ）の絵（かた）、生（い）きたる物（もの）のおそろしげなる、手長（てなが）足長（あしなが）をぞかきたる」。池田亀鑑（他）校注野田（1958）『枕草子・紫式部日記』（日本古典文学大系一九）岩波書店、57頁。

10) 武部前掲論文、84頁。

11) 風間前掲論文、32頁。

12) 「庶民らしい生活感覚から生まれてきた空想と教訓と風刺を持った寓意小説といえるわけだが、もう一つ、海外の「国」に対して、「わが国日本」もまたそれらの複数の国々の中の一つにしか過ぎないという、健康的な相対感覚がそこでは働いているように思われる」。川村湊（2000）「馬琴の島—馬琴『椿説弓張月』」『日本文学研究論文集二二 馬琴』若草書房、115頁。

13) 以下の『風流志道軒伝』引用では、中村幸彦校注（1961）『風流志道軒伝』（『風来山人集』日本古典文学大系五五、岩波書店）を用いた。『風流志道軒伝』219頁。

するという諷刺性」が目立つようになる。「現実諷刺」と「教訓」が『風流志道軒伝』とそれ以降の遍歴小説の顕著な傾向として指摘できるのである。¹⁴⁾

また、途中で展開する異国遍歴小説では、例えば異形の者たちの国では、日本の美貌が醜となるというように（「生（き）た日本人の見せもの、手に入（れ）て這す様なちつぽけな美男」）、¹⁵⁾作品が表明している日本の民族的・文化的・生物学的優位性も、また必然的に相対化されるのである。このような、幻想の異国とその封じ込めについて、以下具体的な作品に触れつつ述べていくこととする。

第三節 平賀源内『風流志道軒伝』の「女護が嶋」

前述の『和漢三才図会』などに倣い、日本で創作された異国遍歴小説の原型となったのが、すでに言及した平賀源内の『風流志道軒伝』である。

主人公の志道軒は、仙人に与えられた団扇（「抑（そもそも）此団扇を以てあふけば、……飛（ば）んと思へば羽ともなり、海川にては船ともなり、遠近を知（り）、幽微（ゆうび）をみる。身をかくさんと思へば、忽（たちまち）に身へざる、奇妙（きめう）奇代（きたい）の重宝なり」¹⁶⁾）を用いて、「彼風来仙人の教（おしへ）にまかせ、是より日本はいふに及（ば）ず、唐・天竺より諸の外国までを、廻り見んとぞ思ひ立（ち）けり」¹⁷⁾と異国への旅立ちを志す。そのために、彼はまず、江戸の遊郭、吉原を出発し、日本国内の、以下のところを旅する（筆者によるまとめ）。そのほとんどが遊郭街、すなわち「島」「国」と呼ばれた領域である。

○吉原→金川・大磯・御油・赤坂、吉田・岡崎・二丁町、古市・山田→浦賀・下田・鳥羽・あおり、長嶋・田部・印南→室津の泊・鞆・おのみち、みたらい・からうと・上の関→三国・新方・出雲崎、敦賀・今町・金沢→坂田かうやの濱、津軽に青森やすかた町、陸奥にもとめや・八丁の目、松前のゑさし¹⁸⁾

その後、以下のような異国を訪問し、その国々の人々の外見、風習、儀式などを日本と比較して述べている。これは主人公が旅をした異国とその異国の風習、様々な異国人の特徴などを、筆者が本文から引用してまとめたものである。

14) 野田前掲論文、2頁。

15) 『風流志道軒伝』191頁。

16) 『風流志道軒伝』170頁。

17) 同書、182頁。

18) 同書、188～189頁。

- ①大人国—何れも身の長二丈あまり、背におふたる子の形も日本人より大なれば、これこそ名におふ大人国ならんとは思へども¹⁹⁾
- ②小人嶋一人の大き一尺二三寸に過(ぎ)ず、一人歩行ば鶴に取(ら)るゝ故、四五人連にてあらざれば、通(り)得ざる程小さき国にて有(り)ければ²⁰⁾
- ③長脚国—体は日本人程なれども、足の長さ一丈四五尺なれば、此川水には流ざるも断なり²¹⁾
- ④長擘国—手の長さ一丈四五尺にて、常に盗を事とすれば、此者どもをかたらひて²²⁾
- ⑤穿胸国—男女とも押(し)なべて、皆胸に穴あり。貴人他所へ行(く)にも、竹輿乗物はなくして、其胸の穴へ棒を通して、かきありけどもいたまず²³⁾
- ⑥例の羽扇に打(ち)乗(り)て、蝦夷・琉球はいふに及(ば)ず、莫臥尔・占城・蕪門塔刺・淳泥・百兒齊亜・莫斯科哥、琶刺敢・亜尔黙尼亞、天竺・阿蘭陀を始として²⁴⁾
- ⑦うてんつ国・きやん嶋・愚医国(菽医国)、ぶさ国、しんごぎ国、いかさま国、樗蒲一嶋²⁵⁾
- ⑧朝鮮—人參のぞうすいを喰ふ事二月ばかり²⁶⁾
- ⑨唐土—清朝の主乾隆帝の住(み)給ふ北京になん至(り)けるに²⁷⁾
- ⑩女護が嶋—此嶋は女護が嶋とて、男は一人もなくして、女ばかり住(め)る国也。子を産(ま)んと思ふ時は、日本の方に向(か)ひて帯をとき、風を請(く)れば、懐胎して又女子を産。王もあれども皆女なり。此嶋の掟にて、外より流(れ)来る人あれば、船より陸へ上る時、国中の女立(ち)出(で)て、磯辺に草履を直し置(き)、其草履をはきたる者と、夫婦となる法なれども²⁸⁾

上記の異国についてまず言えることは、現実の異国(「蝦夷・琉球」「莫臥尔・占城・蕪門塔刺・淳泥・百兒齊亜・莫斯科哥、琶刺敢・亜尔黙尼亞、天竺・阿蘭陀(モウル[ムガール]、チャンパン[=チャンパ、ヴェトナム南部]、ソモンダラ[=スマトラ]、ボルネオ、百兒齊亜[ペルシャ]、モスクワ、琶刺敢[不明]、アルメニア、インド、オランダ)」「朝鮮、唐土)」と、幻想の異国(「大人国」「小人嶋」「長脚国」「長擘国」「穿胸国」「女護が嶋」)、人間の悪徳を「異国」の物語として描いたもの(「うてんつ国[遊びにうつつをぬかす国]・きやん嶋[やくざ者の国]・愚医国(菽医国)、ぶさ国[田舎者の国]、しんごぎ国[いかさまの国]、いかさま国) ²⁹⁾が入り交じって

19) 同書、190頁。
 20) 同書、192頁。
 21) 同書、194～195頁。
 22) 同書、195頁。
 23) 同書、196～197頁。
 24) 同書、199頁。
 25) 同書、199～200頁。
 26) 同書、200頁。
 27) 同書、201頁。
 28) 同書、209頁。

いるということである。幻想の異国については、その住民が日本で標準と考えられる人間のサイズと比較して、巨大・極小（「大人国」「小人嶋」）である、身体の特典部分の長大・欠落がある（「長脚国」「長擘国」「穿胸国」）こと、生物学的法則（生殖）からの逸脱がある（「女護が嶋」）ことなどの特徴が指摘できる。本節では、平賀源内『風流志道軒伝』に現れる幻想と現実が入り組んだ異国の中で、馬琴の『庭莊子珍物茶話』や『和莊兵衛』、そして『椿説弓張月』と比較対照することが有益である、「女護が嶋(女人国(島))」を中心に検討したい。

まず、「女護が嶋」にたどり着くまでのストーリーを概説する。風間誠史によれば、主人公浅之進（志道軒）は、当時の江戸で名物講釈師であった深井志道軒（1680?～1765）をモデルとしている。³⁰この浅之進は、大人国（巨人の国）で「生(き)た日本人の見せもの、手に入(れ)て這(はわ)す様なちつぽけな美男」として、「生(しやう)の物を生で見せる」見世物にされる。³¹その後を訪れた小人嶋では、事態が逆転し、「人の大き一尺二三寸に過(ぎ)ず、一人歩行(あるけ)ば鶴に取(ら)るゝ故、四五人連(づれ)にてあらざれば、通(り)得ざる程小さき国にて有(り)ければ」という小人嶋の人々の姫君を「指にてちよつと引つまんで、印籠の中へぞ入れたる」³²という暴挙に及ぶ。この点だけをとりあげても、浅野進が幻想と現実の両面を持った存在であることがわかる。

浅之進の遍歴は続く。彼はインド（ムガル）、インドシナ（チャンパ）、スマトラ、ホルネオ、ペルシャ、ビルマ、アルメニア、オランダ、モスクワ、朝鮮、乾隆帝時代の北京を放浪することになる。これらの地名を見ると明らかであるが、『風流志道軒伝』では、現実の異国と幻想の異国が混在しているのである。

巻之五になると、浅之進と百人ほどの中国人男性は、女ばかりの島に漂着する。そこで、吉原国(こく)と呼ばれることの多かった吉原遊郭での男女関係が逆転した世界が展開する。ここで「島」という言葉に注目すれば、タイモン・スクリーチが、源内門下の蘭学者・戯作者であった森島中良（1754～1810）の『新義経細見蝦夷』（1785）にふれて述べているとおり、「島」とは遊里を想起させることばでもあった。³³

この「島」はどういう場であったのか確認したい。まず、王も含めて、住民すべてが女のこの島（女護が島）では、住民たちは「男のほしき」³⁴思いに取り付かれていることが注目に値する。ところが、身分の高い者だけが、外来者の男たちを占有してしまっている。これは承認できないと、一般住民が示威行動を挙げて、王宮を取り囲む。こうした事態を

29) 風間前掲論文、32～33頁。

30) 同論文、32頁。

31) 『風流志道軒伝』191頁。

32) 同書、192頁。

33) タイモン・スクリーチ著、高山宏訳(1995)『大江戸異人往来』丸善、14頁。

34) 『風流志道軒伝』210頁。

打開すべく、浅之進の進言で、外来者男性たちが日本の女郎屋のように店を出すことになる。その様子は「四方には堀をほり、茶屋揚屋より諸商人の家くまで、不足なく建ならべ、一方の入口には大門を拵（へ）て、廓（くるわ）中の男は外へ出（で）ざる為にとて、関所（せきしよ）のごとくに番人を付（け）置き、……女ならば女郎といひ、また遊女などゝいへども、是は男の傾城（けいせい）なれば、其名を男郎（なんろう）と呼（よび）」³⁵⁾と、遊郭・吉原さながらである。ただし、ここでは女が買い手で、男が売り手となっており、現実の吉原を逆転した世界であることに注目したい。この女護が島の描写では、現実世界の秩序をフィクションの世界において逆転させてみせることにより、現実世界の秩序が戯画化されている。また、「子を産（ま）んと思ふ時は、日本の方に向（か）ひて帯をとき、風を請（う）くれば、懐胎（くわいたい）して又女子を産（うむ）」³⁶⁾という記述もあるが、この記述からは、神話性・幻想性と、女たちの性交への欲望という現実・卑俗性とが共存していると指摘できるだろう。

しかし、現実と幻想の逆転による享楽は長続きしない。この女護が島において、最初は勤めを楽しんでいた「遊男」たちであるが、次第に嫌気がさし、浅之進以外の男たちは、すべて「色青く瘦（やせ）おとろへ、こつくと咳（せき）の出るのを相図にして、無情（むじやう）の恋風にさそはれ、百余人の遊男ども、西方浄土（じやうど）へくらがへす」、³⁷⁾つまり死亡してしまう。ひとりで多数の客を相手にしなければならなくなった浅之進が、「日頃面白かりし色遊（いろあそび）も、常になりてはうるさきものと、女郎治郎（やらう）の身の上までを思ひやり、あじきな世の有様」³⁸⁾と思い悩んでいたところを、彼に魔法の団扇を与えた仙人が現れる。仙人は、浅之進が訪れたどの国よりも、日本が優れていることを学ばせ、色欲の空しさを悟らせるために、（現実・架空を含めて）諸国を遍歴させたのだと説く。結局、遍歴によって、現実的な秩序が強調される世界からひとまず解放されはするものの、結局は元の世界に回帰することになる。これがこの作品のメッセージなのである。

第四節 遊谷子『異国奇談和莊兵衛』の「女護が嶋」

次に、遊谷子『異国奇談和莊兵衛』について考察する。馬琴が『庭莊子珍物茶話』で主人公を「和莊兵へ」と名付け、『夢想兵衛胡蝶物語』の冒頭で「一日遊（あるひいう）谷子（こくし）が著（あら）はしたる、和莊（わさう）兵衛（ひやうゑ）といふ冊子（そし）を見て思（おも）ふやう」³⁹⁾とあるように（「発端」）、ここで取り上げる『異国奇談和莊兵

35) 同書、211頁。

36) 同書、209頁。

37) 同書、212～213頁。

38) 同書、213～214頁。

衛』を意識していたことは間違いない。

『和莊兵衛』を要約すると、次のようになる。長崎在住の人である和莊兵衛は、「唐人紅毛(とうじんおらんだ)のつき合(あひ)和漢(わかん)をあへませ、ちんぶんかんに」⁴⁰⁾暮らしている。ある日、海釣りをするうち、沖に漂流して不死国に漂着する。そののち、鶴や亀に乗って、自在国、矯飾国、好古国、自暴国、大人(だいじん)国、清浄国、長足国、金銀宝玉国、交蛮国などを訪れる。最初はどの国にいても、感嘆するばかりの和莊兵衛であるが、ついには、どの国にも失望して、別の国に旅立つ。そして、多くのエピソードに、「養生」(教訓)が付されている。

一例を挙げる。和莊兵衛は、すべての欲望が、「自在」にかなえられる「自在国」を訪れる。そしてその沖合には女人国がある。

何でものぞみ次第にはさみ切て、衣服(いふく)を調ることなり。自由なる事衣食(いしょく)の二つのみならず、聞及し女護島(によごのしま)も、即(すなは)ち此(この)自在国(じざいこく)の領内にて、城下(じやうか)より二里ばかりの船(ふね)渡(わた)しを越(こ)へて行(ゆ)けば、男は一人もなく、女ばかりの国なり。しかも余国(よこく)にすぐれて色(いろ)白く、自在国の内なれば、雲(くも)の衣(い)しやう花(は)のすがた、何れ劣(せ)しは一人もなく、其(ち)うへ千(ち)びきの糸のくるしき賤(しづ)の女(め)の手業(てわざ)一(ひと)つとして、するに及ばず。……身(み)だしなみに打(う)かゝつて居(い)るゆへ、手足(てあし)のじんじやうに、心(こ)ざまもやさしく、貞節(ていせつ)なり。昔(むかし)はやうく日本(にっぽん)の方(かた)から吹風(ふかぜ)に身(み)を任せしとかや。⁴¹⁾

この引用をまとめると、「男は一人もなく女ばかりの国」であるこの島では、生活の苦勞がないために、女性たちは美貌でスタイルがよく、「心ざまもやさしく、貞節」である。さらに、昔は日本から吹風で妊娠していたとされており、従来においての女護が島伝説を引いていることがわかる。

付け加えておけば、『三才図会』『和漢三才図会』『唐土訓蒙図彙』に由来するであろうそうした女人国伝説は、沢井某作『和莊兵衛後編』(1779)にも引き継がれており、挿絵(【図五】)をみても、同様の話であることがわかる。『三才図会』から多くの知識を得た『唐土訓蒙図彙』(1719)の挿絵(【図四】)をみても、井戸に自分の影を写している女人国の女性が描かれている。また、『和莊兵衛後編』での女人国は、「此(この)国女(くにおんな)ばかりなれば、家(いえ)くに井(い)どをほり、我(わが)かげをうつし懐胎(くわいたい)す。また海辺(かいへん)に出(いで)て南(みなみ)にむかひ、裸形(はだか)に成(なり)て、風(かぜ)をあつればはらむといふ」⁴²⁾と、井戸に自分の影を写して、ある

39) 国民図書編(1927)『夢想兵衛胡蝶物語』(近代日本文学大系第十六卷)国民図書、347頁。

40) 岡雅彦校訂(1990)『和莊兵衛』(『滑稽本集一』)国書刊行会、9頁。

41) 同書、22頁。

いは風により妊娠する国として書かれている。いずれも注目に値するだろう。



【図四】『唐土訓蒙図彙』女人国



【図五】『異国再見和莊兵衛後編』女人国

第五節 曲亭馬琴の女人国（女護の島）

馬琴には多数の異国遍歴物があるが、本節で注目したいのは、主人公が住民のすべてが女性である場所を訪れる、一連の女人国（女護の島）モチーフを含む作品である。

まず、黄表紙『風見草婦女節用』では、女人国（女護の島）に吹く春風が島の一番娘、竹婦人と恋仲になるが、竹婦人に横恋慕する大嵐とその協力者に妨げられ、駆け落ちしようとする。いわば風が擬人化され、二人の恋の顛末を風に関連づけて語られているのである。

欧邏巴州(おうらばしゆ)大海(たいかい)の東(ひがし)に女人国(にょにんこく)あり、世にこれをによご(女護)の島といふ、こ女ハ風を以て夫とするなり、兎の月を見て孕ミ、亀の蛇と交わるが如く、一年に一度南(みなみ)風が吹く時、若い女ハ身もちになるが習わしにて、夫婦の事を風婦と書き、子供ハ風の子といふ譬も此嶋の事と見へたり。43)

この引用で重要なのは、女人国が「欧邏巴州大海の東」にあるとされていることである。この女人国の話自体は、馬琴が入手した情報源を考えると、おそらく『三才図会』『和漢三才図会』を基にしているだろう。しかし、その女人国の位置については、ヨーロッ

42) 同書、『和莊兵衛後編』81頁。

43) 林美一編輯・校訂(1952)「風見草婦女節用」『未刊江戸文学』第三冊、未刊江戸文学会、24頁。

パ（欧羅巴）の東にあるとされており、『三才図会』に見られる地理観とは異なる。これは古代ギリシアで、女性のみからなる部族・アマゾン族が、ヨーロッパの東（かつてアマゾン海と呼ばれていた黒海沿岸）に棲息していたとする神話に由来する可能性がある。このことについて、馬琴は後に執筆した『兎園小説』で、亀屋久右衛門「銀河織女に似たる事」に解説を付し、「亜瑪作擲(アマサニイ)」について述べていることに注意したい。長きにわたり北京に駐在したイエズス会士マテオ・リッチの地理書『坤輿図説』にふれて、「韃而鞞（タタール）のそばに、亜瑪作擲川が流れており、その西側には昔、女の国があった」と述べているからである。

なお、女人国の女性は、風で妊娠するという神話は、この作品では（女）「身もちになると風声になるから、じきに知れやす、モウく子供ハ嫌(いや)、子ハ三界のくび風でござります」（子供）「おいらハこんなものを貰ひました、とつさんが吹いて来たら廻して貰おうの、かゝさん「この島ではんさんをする時ハふいぐと尻ばかりひつている、これ風の子の証拠也」⁴⁴⁾という箇所、滑稽に活用されている。

次に、馬琴の黄草紙『庭莊子珍物茶話』について触れよう。これは、和莊兵へが穿胸国の男と手長島の女を連れ帰り、男は見世物とし、女は遊女にして大儲けをするという話である。【図六】主人公の名前は、遊谷子作品の「和莊兵衛」ではなく、「和藤兵へ」となっている。この作品では、和藤兵へが穿胸国と手長島を訪れる冒険は描かれず、もっぱら遍歴中に取得した材（穿胸国の男と手長島の女）を、帰国後、どのように有効に活用するかが語られる。

むかし八文字屋(もんじや)が筆(ふで)にあらはしたる和莊兵へが悴(せがれ)に、和藤兵へといふ船乗(ふなのり)あり。ある時筑前船(ちくぜんふね)をのりて難風(なんふう)にあるとあらゆる島(しま)へを巡(めぐ)り、やく五年めにてふるさとへ立かへりしが、しまへの話(はなし)や珍物(ちんぶつ)はおやち和莊兵へがいひふらしたれば、何とぞ手軽(かる)な金儲(かねもう)けがありさふなものと、島(しま)へを巡(めぐ)るうち、……第一の案(あん)じは女御(にやうご)の嶋の風(かぜ)ぶくろ、手長(なが)嶋のむすめ、穿胸国(せんきやうこく)のむねにあなのあいた手合、たった三いろなり。これらはどんなあたじけな山師(し)に見せても一足(そく)や二足(そく)が値打(ねうち)はありそうな代物(しろもの)なり。⁴⁵⁾

主人公の父、「八文字屋(もんじや)が筆(ふで)にあらはしたる和莊兵へ」とは、遊谷子（「八文字屋」）の『異国奇談和莊兵衛』への言及と見られる。和莊兵への息子であり、主人公である和藤兵へは、島巡りをした父親の和莊兵へがすでに島の「話(はなし)や珍物(ちんぶつ)」は持ち帰っているため、それを真似するだけでは面白くないと、それら

44) 同書。

45) 清田啓子(1978)「翻刻 曲亭馬琴の黄表紙(四)庭莊子珍物茶話」『駒沢短期大学研究紀要』第六号、駒沢短期大学、67頁。

の珍物で「手軽(かる)な金儲(かねもう)け」をしようとする。異国の島々を巡り、彼が集めたのは、「女御の嶋の風ぶくろ、手長嶋のむすめ、穿胸国のむねにあなのあいた手合」である。そして、「たった三いろなり」という表現からは、「珍物」と聞けば当時の読者や見世物の観客ならば「たった三いろ」以上の種類の「珍物」を期待するであろうと馬琴が予想しつつ、和藤兵への見世物商売の矮小さを戯画化していることがうかがえる。しかし、「たった三いろ」という多彩さに欠ける見世物ではあっても、欲の深い（「あたじけない」）山師的人物であれば、多少の金（「一足(そく)や二足(そく)」）は出すであろうと和藤兵へは予想したのであった。

もう一つ、興味深い箇所を引用する。馬琴は当時の江戸に実在した見せ物「銅（胴）人形」、別名「図法師」という名で知られた機械人形を踏まえて、以下のような穿胸身体開示展覧会とでもいうべきものを描いている。

和藤兵へは故郷(こきやう)へ帰(かへ)ると早(さつ)速(そく)せんきやうこくの手合(てあい)を見(み)せ物(もの)とはかねての案(あん)しなれど、たゞそのまゝ見せては桂粉(けいふん)を飲過(のみすぎ)た瘡毒病(そうどくやみ)をみるやうでおちが来(こ)まひ。とかく売物(うりもの)にははなを飾(かさ)れと、なをもこのうへに欲(よく)が出て、胸(むね)に穴(あな)のあるを幸(さいわ)ひに、腹(はら)の内のからくりをみせる。……眼前(がんぜん)人(ひと)のはらの中をみる事なれば、見物雲霞(けんぶつうんか)のごとく、和藤思ひの外(ほか)のかねのつるに取りつく。46)

タイモン・スクリーチは、「銅（胴）人形」、別名「図法師」について、中国から入ったのかヨーロッパから入ったのか不明であるが、人間内部を表す立体模型で、小型のものも等身大のものもあり、扉が付いていて開けると内部を見ることができたとしている。47) 『庭莊子珍物茶話』の「せんきやうこく」の住民は、いわば生きた「銅（胴）人形」として、胸の穴から、「腹のうちのからくり」を見せるのである。これが思いのほか大受けで（「はらの中のからくり思ひの外おちがきて、銭金のつかみ取り」）、48)和藤兵へは大もうけをしたというわけである。

他方、手長島の女はその身体的特徴を活かして、歓楽街の客引き（「おき人形」）になる。次の引用において、「こはん娘」とは背の小さな女が碁盤の上で花笠を持って踊る見世物で「碁盤娘」であり、「鉄砲店」とは、関係を持つと性病にかかるかもしれない下級の遊女を置いていた売春宿のことである。

手なが島(しま)の女は見せものにだしてもこはん娘の押被(おつかぶ)せのやうで見物(け

46) 同論文、68頁。

47) タイモン・スクリーチ前掲書、170頁。

48) 清田前掲論文、69頁。

んぶつ)も受取(うけとら)ず、ながくかゝへておく程(ほど)米(こめ)をくふ代物(しろもの)ゆへ損(そん)がゆく。さすがの和藤兵へもこれには大にもちあましけるが、……ら生門河岸(かし)の鉄砲店(てつぱうみせ)へ目見得(めみへ)にやつた所が早速(さつそく)に相談(そうだん)ができて、……みせのおき人形(おきにんぎょう)にしておいて、格子先(こうしき)をぶらつく客(きやく)を引ッはらせる。49)

次頁の【図七】に見えるとおり、手長島の女は、その長い手で客を郭内に無理矢理引き込む「おき人形」として描かれている。ここでの手長島の女は、身体特徴においてこそ驚異に満ちた異国性を帯びてはいるものの、その行動においては通常の日本の遊女と変わりはない。ここで遊郭街である吉原が、しばしば「島」あるいは「国」と呼ばれていたことをもう一度想起しておこう。ここでの手長島出身の女は、日本の吉原という「島」、女のみが住む「国」の住民、すなわち女人国(女護の島)の住民に変身するのである。

『庭莊子珍物茶話』の結末部はきわめて教訓的である。和藤兵への大もうけに嫉妬した庵相兵へは、和藤兵への商売の乗っ取りを計るが、和藤兵へ、穿胸国の男、手長島の女(転じて遊郭女護が島の女)の協同作戦により捕えられ、和藤兵へに「教訓」を与えられることになる。和藤兵へは自分が突然大金を得たために、人に嫉まれ間違いを犯させることになったと反省し、それまでの穿胸国・手長国の見世物で儲けた金を三等分して、穿胸国の男と手長国の女に三分の一ずつ与え、故郷へ帰る旅費に充てさせる。つまり、和藤兵へは、自分が雇用した者たちに正当な賃金を与える、ある意味では、公正な雇用主として描かれている。このように、驚異はいわば終息してゆくのである。



【図六】『庭莊子珍物茶話』



【図七】『庭莊子珍物茶話』

ここまで、馬琴以外の著者によるものと、馬琴の筆になるものを含めて四つ(『風流志道軒伝』『異国奇談和莊兵衛』『庭莊子珍物茶話』『風見草婦女節用』)の遍歴小説を見てきたが、これらの作品における異国は、そこに住む存在が異形で、不可思議な風習をもっていて、それに驚異の目が向けられることはあれ、それらの存在が脅威となるも

49) 同論文、69頁。

のではなかったことに注意したい。彼女／彼らの正体は、市井の日本人と滑稽にも似通った者とされ、彼女／彼らの他者性や異質性からは、予め危険性が除外されている。異国は幻想的な異界性を帯びているにしても、そこから脅威が到来する場ではないのである。さらに、異国やその奇妙な生物たちは、日本内部の悪習や悪徳を戯画化するための、寓意として登場させられている場合が多い。その意味では、これらの遍歴小説に登場する不可思議な存在は奇妙にも身近な存在なのである。驚異に満ちた別世界を巡る荒唐無稽で見世物的な娯楽的要素と、異様な姿や風習をもつ異国の姿に仮託して、日本国内の悪徳を戯画化し風刺する道德主義的態度とが、平行して表れているのである。

こうした道德主義的態度は、異国遍歴小説を教訓的なものにしており、驚異に満ちた別世界の娯楽的価値を奪うものであろう。教訓化された遍歴小説は、すでに、この世の法則から遊離して、想像力が自由奔放に駆け巡ることのできる世界を描くものではなくなってしまっているのである。

それでは、ここで『椿説弓張月』の「女護が島」「鬼が島」遍歴について触れておきたい。この作品の、いわゆる八丈島渡り物語群においては、遠く離れた異国や周辺地域のもつ幻想性・怪奇性を、巨大化させる方向性がまず注目される。そして、同時に、異国やそれに近接した日本の周辺地域は日本と多少の文化の違いはあるものの、根幹的には日本と変わらない世界であり、異国や周辺地域にまつわる伝説や神話は訛伝の結果生まれたものに過ぎず、合理的に説明できるとする方向性が存在している。異国や周辺地域の異国性を強調する方向性と、異国や周辺地域と日本の同質性を強調する方向性である。前者では、異国・周辺地域の存在の、グロテスクで異界的な混沌と野蛮、怪物性が前面に出ており、概ね、為朝の敵方にこの方向性と属性が付与される傾向がある。これが極点にいたるのが、琉球物語群の「矇雲」表象である。後者は、為朝の味方につく側の特徴となっている。異国や周辺地域出身で、為朝に味方する者たちについては、異様さや奇怪性が目立たないもの（あるいは、合理的に説明できるもの）とされ、異国や周辺地域の日本への同化が、「文明化」や、混沌・未開・野蛮の打倒、中心の秩序・文化・技術の伝授という恩恵として語られる。つまり、異国から異界的な要素が排除され、日本に同化可能なものとされるのである。

保元の乱に破れた為朝は、伊豆大島に流罪され、そこで伊豆・工藤茂光の娘・簾江を娶る。伊豆の島々歴覧中、「女護嶋、鬼が嶋」の噂を聞くが、為朝は、中国伝説に見える「女国」と「鬼が嶋」を、受け入れがたい迷信であると一笑に付す。

「扶桑(ふそう)の東(ひがし)に女国(によこく)あり」とは、唐山(もろこし)の書(ふみ)にも見えたれど、こはうけがたき説(せつ)なり。まいて鬼(おに)の住(すむ)といふ、嶋(しま)ありとはおぼつかなし。……彼島(かのしま)も実(まこと)の鬼(おに)の住(す)むにはあらで、往還(わうわん)の艱苦(かんく)なると嶋人(しまびと)の醜悪(しうあく)なるによつて、鬼(おに)といふ名

(な)を負(おは)せたらん。50)

この伝説の真偽を確かめようと船出した為朝は、到着した島の海岸で、女たちが「草履(さうり)の尻(しり)を沖(おき)のかたへさし向(むけ)て、いくつともなく並置(ならべおき)しかば」51)という様子を見た。女護が島伝説(平賀源内『風流志道軒伝』で、「外より流(れ)来る人あれば、船より陸(くが)へ上る時、国中の女立(ち)出(で)て、磯辺(いそべ)に草履(ぞうり)を直し置(き)、其草履をはきたる者と、夫婦(ふうふ)となる法なれども」52)と述べられていた伝説は、現実のものであったのかと驚く為朝であった。そこで出会った女性は、不思議にも流暢な日本語を話す。前夜、夢のなかに現れ、為朝の到来を告げた耆婆明神が、その女性に日本語を教えたのだという。

為朝は女護が島の伝説に対して、「女護嶋人(によごのしまびと)は、南風(なんふう)に吹(ふか)れて孕(はら)むとかいへど、こは物こゝろしれるものゝ、いかで実言(まこと)とは聞(き)くべき」53)と疑念を呈する。それに対して、島の女性(男の島の、東七郎三郎(ひがしのしつちやうさほり)の長女(によこ))は次のように説明する。泰の始皇帝の命で、徐福は不老不死の妙薬を探し「男(お)の童(はらは)、女(め)の童(はらは)五百人」54)をつれて船出したが、不老不死の妙薬の入手に失敗し、帰国した場合に受ける後難を恐れ、日本・熊野に留まることに決めた。随行した女の童はこの島に、男の童は別の島に放置されたのが、これらの島の始まりである。言い伝えに、「妹背(いもせ)の契(ちぎり)は締(むす)べども男女(なんによ)ひとつに住(すむ)ときは、海神(わたづみ)の祟(たたり)ありと」55)いわれているため、男女別に住んでいる。南風に吹かれて妊娠するという伝説は、一年に一度「南風(みなみかぜ)の吹(ふく)日あれば海神(わたづみ)の御許(みゆるし)あり」56)として男島の男が女島に渡り、男児が生まれれば男島に送り、女兒が生まれれば女島で養育することが、誤って伝えられたものであろう。これが長女の説明である。そして、為朝は琉球を巡る物語群においてと同様、〈周縁〉の混沌・未開・野蛮を打倒し、中心の秩序・文化・技術をもたらすことで、支配・統治する為政者のようにふるまっているのである。

以上、『椿説弓張月』の女護が島や鬼が島に関するエピソードには、幻想性や奇想性が満ちあふれていることを確認した。しかし、この話に登場する者たちも、どこか滑稽さをたたえるなどしており、人々を脅威にさらす真の〈他者〉とは言えないだろう。なぜならば、この人々は為朝の文明化政策にみずから進んで従う者として表象されているからである。

50) 後藤丹治校注(1954)『椿説弓張月上』岩波書店、246頁。

51) 同書、249頁。

52) 『風流志道軒伝』209頁。

53) 『椿説弓張月上』253頁。

54) 同書、254頁。

55) 同書、255頁。

56) 同書。

第六節 おわりに

幕府の鎖国政策下にあっても、主に江戸在住の一部の知識人を中心に、人々は国を憂える危機意識から、異国に関する情報を入手しようとしていた。こうした人々が入手した異国情報の中には、やがて彼らの手によって書籍にまとめられるものもあり、禁書令に触れない範囲内で、一般庶民にも異国情報に触れる機会が与えられるようになった。彼らが異国を経験する方法としては、その当時の風聞や書物によるしかなかった。書物としては、当時、中国から伝来してきた百科事典・類書、地理書を参考にして書かれた『和漢三才図会』『華夷通商考』などがある。そこに描出された異国像には、中国、朝鮮、琉球、一部の東南アジアなどの、日本周辺から、遠くヨーロッパまでが含まれている。そして、こうした実在の国々と前近代的な空想や幻想が入り混じっていた。

ただし、こうした知識を利用した異国遍歴小説においては、現実の異国はおろか、幻想の異国からは、その異国性が除去され、馴致され、包摂される傾向があった。平賀源内、遊谷子、そして馬琴の作品における「女護が島」に関わる表象は、特にそうだった。馬琴の作品を含めて、江戸時代の異国遍歴小説は、空想・幻想による荒唐無稽な異国が、あたかも見世物小屋の怪奇と珍奇に満ちた内部をのぞき見させるかのように描かれている。その意図は未知の世界に関する好奇心を刺激するためであり、もっと卑俗な形では性的零困気を漂わせることで、読者の感性的欲望を満足させることに集中するものであった。しかしそうした欲望は最終的には終息していくのである。付け加えるならば、このような傾向が馬琴の作品、ひいては馬琴の、そして馬琴のような知識人の、現実に存在する異国に対する態度とどのような関係があるかについては、さらに検討を重ねる必要があるだろう。

【参考文献】

- 板坂則子(1979)「戯作のファンタジー」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、70頁
- 池田亀鑑(他)校注(1958)『枕草子・紫式部日記』日本古典文学大系一九、岩波書店、57頁
- 小谷信行(1996)「和莊兵衛の系譜」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』鈴鹿工業高等専門学校、101頁
- 岡雅彦校訂(1990)『和莊兵衛』(『滑稽本集一』)国書刊行会、9頁、22頁。『和莊兵衛後編』81頁
- 風間誠史(2002)「『和莊兵衛』覚書—世界の外へ」『相模国文』相模女子大学国文研究会、32~33頁
- 川村湊(2000)「馬琴の島—馬琴『椿説弓張月』」『日本文学研究論文集二二 馬琴』若草書房
- 清田啓子(1978)「翻刻 曲亭馬琴の黄表紙(四)庭莊子珍物茶話」『駒沢短期大学研究紀要』第六号、駒沢短期大学、67~69頁
- 国民図書編(1927)『夢想兵衛胡蝶物語』(近代日本文学大系第十六卷)国民図書、347頁
- 後藤丹治校注(1958)『椿説弓張月上』岩波書店、246頁、249頁、253頁、254~255頁
- 佐藤至子(2001)「試練としての異界遍歴」『日本文学』日本文学協会
- 武部健一(2007)「『山海経』研究の歴史とその現代的意義」『成城国文学』二三卷、84頁
- 寺島良安著、島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注(1986)『和漢三才図会三』平凡社、331頁、333頁
- 中村幸彦校注(1961)『風流志道軒伝』(『風来山人集』日本古典文学大系五五)岩波書店、170頁、182頁、188~201頁、209~214頁
- タイモン・スクリーチ著、高山宏訳(1995)『大江戸異人往来』丸善、14頁、170頁
- 野田寿雄(1965)「近世後期の異国遍歴小説」『国語国分研究』第三一号、北海道大学国文学会、2頁
- 播本眞一(2005)「馬琴と異国」『江戸文学』べりかん社
- 林美一編輯・校訂(1952)「風見草婦女節用」『未刊江戸文学』第三冊、未刊江戸文学会、24頁

要 旨

Contrary to what people might think, Edo people were absolutely curious about foreign culture, and that is part of the reason why imaginary travel stories, including *Wasobyoe*, and *Huryusidokenden*, *Chinsetsuyumiharizuki* were enormously popular.

Images of foreign countries in Edo period, offered as wonderful and amusing shows, testify people's innocent curiosity for the strange and marvelous. But the problem is, the innocent curiosity for the strange can sometimes be separated from the desire to conquer the 'Other.'

In *Wakansansaizue*, the foreign lands, or *Ikoku*, are divided into two groups: actual foreign countries and imaginary lands of Barbarians, or *Gai-I*. Actual foreign countries include China, Korea and Ryukyu. Lands of Barbarians are full of strange and wonderful monsters. Land where only women lives, or *Nyoninkoku*(*Nogogasima*). Women in *Nyoninkoku* are said to become pregnant by south wind or wind.

Nyoninkoku is placed west to China, south east to Europe, or *Ko-Mo Koku*. There are no land or sea routes to *Nyoninkoku*. In this country, residents are all women. They are courageous and warlike. The country law dictates that men from foreign countries are to be invited to *Nyoninkoku* in spring.

Key Words : *Wasobyoe*, *Huryusidokenden*, *Chinsetsuyumiharizuki*,
Wakansansaizue, *Nyoninkoku*, *Ikoku*

투 고 : 2014. 5. 31
1차 심사 : 2014. 6. 14
2차 심사 : 2014. 7. 5